

義理チョコを断るのは絶交宣言に近い。お歳暮はお世話になった方への御礼の気持の表現、つまりお返しであり、今後も変わらぬ世話を下さいとの要請だ。ワイロはお返しを先に済ます贈り物の保証だ。サンタは父が良き子らへのみ与える交流の使者だ。

贈り物はお返しが期待されて存在する。このメカニズムを理解したところでヒトがヒトになったのではない。母乳の赤子への授乳は贈り物（給付）ではないだろう。お返しがないときは一方的消費であり、それでは「資源」が枯渇し、贈り物がなくなってしまう。この世における生命活動の循環がなくなるということだ。朝まだき竹藪を越えて飛んできたのは大根だったが、今ここで、エントロピーがハン竹に通過してきた。

広場に集まって獲物を平等に分配するのは、それが贈り物だからだ。贈り主は獲物の稼ぎ手ではない。稼ぎ手は贈り主によって使用された「手」であり、「手」であることによって広場の賞賛を贈られる。収穫祭や熊祭りは贈り主への感謝を捧げる儀式であり、供物はささやかなお返しだ。贈り物と物々交換はどのような関係にあるのだろうか。

共同体（私のシマ）には境界があり、そこで異界のヒトと接触し、贈り物を交換し交流になる。また境界で物々交換が盛んになり、

「贈与」を考える

マルセル・モースの竹藪から

講師：船木拓生（劇作家）

2012 / 4 / 28 15:00 - @ GALA

商取引が成立する。第三者が介在し、商人が発生し、貨幣が通用するようになり、信用そのものが独立すると為替の類になるし、銀行もでき、そして国境（通貨域）を利してマネーゲーム（および金融破滅）をもたらした。

「戦争は政治の一形態である」と喝破したのは、十九世紀初頭のプロシヤの軍人だった。共同体の存在が領域を条件にするかぎり紛争は必然だろう。妥協（=政治）による決着までの力比べが戦争だ。だから紛争は交流の一形態であり、贈答の一形態だから、お互いに復讐を必然視している。贈与関係は相手が絶滅しないかぎり続く。物々交換はどちらかが不満ときには成立しない。贈り物自体によるエコノミー（経世済民の合理）というのがあるのではない。第一次世界大戦が求めた賠償はあるべき贈答（形態）を越えたことによって「破滅」をもたらした。

天災の字義は天が人間に与えた災いだ。天による負の贈与だ。古来、天は人の奢り、傲慢にたいして厳しかった。今、あちこちから聞こえる「絆」は、天に対してする、無力なる人の側からのせめてもお返しなのだろう。しかし地空を翔ける放射能は天災ではない。原因を人が造り、従ってまた当然、それを除去できる。これの贈り主は東電であり、これに知恵を付けた学者と推進してきた政治家らだ。彼らとの絆はありえない。何に対する誰らによる絆か。だ。お返しはやはりきちんとしなければならない。パールハーバーのお返しの軍事基地へなにを贈るか、すでに南島の意思は決定している。

トカラに発した南風は『贈与論』によって渦巻きを起こした。そのダイナミズムが参会者の「ブレイン・ストーミング」を誘発することを願っている。

会費 カンパ制(任意)

場所 ギャラリー-GALA
世田谷区梅が丘1-26-5-2F(小田急線梅ヶ丘駅南口徒歩1分)
<http://www.ap.to/~gala/>

連絡 090-4713-1299(稲垣一雄)
080-5085-2477(橋爪太作)
info@tokarajuku.sakura.ne.jp

主催 文化結社トカラ塾(<http://www.tokarajuku.sakura.ne.jp/>)

